

百色^(ひやくいろ)メガネ

ふくださち



百色メガネ



河出書房新社

百色メガネ

昭和五十六年十二月一日 初版印刷
昭和五十六年十二月十日 初版発行

著者 ふくださち

装幀者 田沢 茂

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 編集〇三―四〇四―八六一―

営業〇三―四〇四―二二〇―
振替口座(東京) 〇一〇八〇二

印刷 株式会社享有堂印刷所

製本 株式会社中西製本

©1981 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

ふくださち

本名・福田幸雄。

昭和四年神奈川県生まれ。

現在、地方新聞社勤務。

「百色メガネ」で昭和五十六
年度文藝賞を受賞。

百色メガネ

堂間隆はS拘置所で処刑された。この地方の山村に初霜が降りた、底冷えのする朝だったという。堂間はこの日の朝、訪れた教誨師に顔や手足の生々しい擦過傷を見せ、一晚中暴れ、手錠足錠の世話になってしまいました、でも、もう平気です。それにしても、また冷え込みの厳しい季節になりましたね……、まるで独り言のようにつぶやきながら、独房の明かり取りの窓から灰色の折り紙を一面に貼りつけたような曇り空を、腫れぼったい目でいつまでも眺めていたという。教誨師の導きの言葉にも穏やかな表情でうなずき、事後の件について時間いっぱい話したという。死刑確定者が一定の拘置期間を過ごし、それなりの落ち着きを見せていても、いざ処刑場に臨んで指示されたとおりの行動はとれない。多かれ少なかれ立会看守の手を煩わすものだという。しかし堂間の場合は例外のようだったらしい。さあ、怖がることは何一つありません。この敷物の上を静かに歩いて、あの中央の祭壇の前でいつものお祈りをするのです。すぐ神様が迎えに来て楽にしてくれます——。教誨師の朝と同じ導きの言葉に対し堂間は、楽とは死ぬことなんですネ。

あの齒の痛みの苦しさを、もうしないですむんですね——。ほとんど義齒だらけだが、持病の齒痛が治まったばかりの、まだ腫れが残っている右頬に手をやったという。堂間が正常だったのはそこまでで、あとは処刑室の狭い床を転げ回った。固い床に肉塊を敲きつける鈍い響き、悲鳴が処刑室の空気を乱した。規定の錠だけでは作業が進まなかった。最後は立会看守数人の手で、両腕、両足、顎と主要関節の脱臼処置がとられ、静かな軟体動物のような格好で処刑位置に運ばれ、祭壇の前の祈りも形だけで、押え込まれたままの格好で、敷物の下の踏み台が落とされたという。堂間の刑執行を知らされた翌朝、私は例の行事をした。いつものように紙の輪は数えず、二本のトイレットペーパーで無造作に輪を作り鴨居にかけた。初めて頸骨にそれとわかる、当たりのような衝撃を感じ一瞬、動脈が梗塞し、躰が宙に浮くような虚脱感が走り、尻から畳に落ち転倒した。あとロール三分の一使っていたら、そのまま失禁状態で終わってしまったかもしれない。た。

窓の隙間風で部屋中に散った紙を、ハサミで適当な長さに揃え、共同といってもいまでは私一人の専用になってしまったトイレの落とし紙の箱に収め、そのまま用もないのにその場にしゃがみ込んだ。そして教会関係者と名乗る男が、何の目的でこの住居表示の番号だけが生き残っているような共同住宅を捜し出し、堂間の処刑の模様を伝えに來たのだろうかと考えた。男は入り口の床に立つと挨拶もそこそこにいきなり「堂間さんの処刑は、どこかで間違っていた。そう思いませんか」そう一言つぶやくと部屋の中を覗き込んだ。身の置き場所を部屋に求めているような、

疲れた表情だった。私は終えたばかりの食卓のかたづけをやめ、男の侵入を阻止するように男の前に坐り込んだ。処刑がどこかで間違っていた——そういきなり言われたことが、私を固い身構えにさせた。教会関係者と名乗る男と、堂間の処刑についてあれこれ話したくなかった。堂間が七日前の朝、処刑された——。私に知らせてくれるのだったら、その一言だけで充分だった。男は私の心を読み取りでもしたのか「人間です。いろんな死に方に巡り合います。しかしあの処刑は考えものでしたね」男はそう言う入り口の戸に身を預けるようにした。この場所でこの姿勢で結構です——そんなあきらめの構えのようだった。だが男の話は聖書の講義でもするように、同じような内容を言葉だけ変え二回以上も繰り返した。一人の人間の死を伝えるには、あまりにも物語のだった。虚構が交じり過ぎていると思った。男の長い話の中で私の胸を刺したのは帰りに言った「堂間さんの処刑は、見苦しいほど悲しかった」その一言だけだった。その夜、私はM子が働いている店を訪ねた。

ネオンの灯が、まだ薄ボンヤリ点滅していた。小さなビルや飲食店が隣り合わせに続いた通りのどこかに、まだ太陽の光が残っているような明るさがあった。これが宵の口とでもいうのだろうか。通行人もネオンの文字や、派手な点滅に馴じまない表情で、近くの私鉄の駅に流れているようだった。私鉄の駅がぐっと遠くなったように、人の流れがネオンの灯に足をとられるまでには、まだ時間が早いようだった。M子が働く店をこんな早い時間に訪ねるのは、はじめてだった。正確には二度目なのだが、一度目はM子の保証人みたいな立場で、店の総支配人という若い男と

会うためだった。場末の歓楽街のこの種の店に職を求めるのに保証人もないもんだと思つたが、M子が母親に保証人みたいなものが必要だ——と話したことから、私とその役目を引き受けることになった。だれでも最初はレジ係という職種で、多少は金を扱うらしく、店としては一応、形だけの保証人を求めたものらしかった。だがM子の母親は「要保証人」という新しい職に、世間一般に通用する職場とも思つたのか、胸をなでおろしたような表情で、書類だけでも済むのにくらかの交通費まで包んで、わざわざ私に届けてくれるように頼んできた。そこには胸をなでおろしたというものの、娘の何回目かの勤め先の様子を、人目を通してでも聞きたいという気持ちがあるようだった。しかしその母親は私の報告を聞いて間もなく、自分から死を追いかけるように鉄道自殺を図つた。

M子は医院の診察台のような、人一人がやっと寝られる細長いマッサージ台に横になっていた。軀の一部を隠しただけの営業用のスタイルで、両腕を胸に膝を折り曲げたいつも見なれた胎児の姿勢だった。M子はドアの入り口に立った私の姿に驚いたように起き上がったが、客でないことがわかれるとゆっくりした動作で台に坐った。正常位の胎児が何かの拍子で、頭をヘソに向けてしまった。そんなぎごちない坐りかただったが、産まれるのは嫌だ。出て行けと言うなら、最後は逆さ児になつてでも一暴れしてやるわ、といった胎盤を必死で握り締めている顔だった。横の棚から菓子罐を取り、口いっぱいにガムを含んだ。忙しそうに口元を動かし、ピンポン玉ぐらいの大きさになった固まりが、こんどは口笛でも吹くように、唇が息を吐いたり吸い込んだり

していたと思ったら、いきなり白いガムが細長く変形しながら飛び出し、まるで吹き矢のような正確さで部屋の隅の屑箱におさまった。

「そんなところに立ってないで、中に入ったら。それにしても早いじゃないの。型は古いようだけれどスーツなんか着込んで、だれかと思ったわ」

M子はやっとあの胎児の姿勢を崩し、壁に掛けてあった海浜着のようなタオル地のガウンを羽織った。

「なんだか驚かせてしまったようだね」

私は部屋の様子を窺うようにしながら言った。M子には詫びているように聞こえたのかも知れなかった。

「なんのなんの、この商売してて男の姿にいちいち驚いていたんでは、それこそ商売にならんよ。もし驚いたように見えたのならまだまだ未熟。この社会で生活出来ないでいる証拠じゃよ」

おどけた表情だった。だが、その表情はすぐ消えた。いつだったか——交通信号の青、黄、赤、の三色あるのっていいわね。あれが青、赤の二色だったら、どうなると思う。いそがしくて大変よね。あのわずかな黄色の間って言うのかな、信号で言えば流れをいったん中断させるような時間が大切なよね。ところがあたしにはその黄色の中間ってのがないみたいなの。自分でもせわしく感じるし疲れることがあるの——そう言っていたことがあるのを思い出した。いまのM子の表情の変わりかたが、M子の言うせわしくて疲れる変わりかたでないかと思った。しかもその変

化は青、赤が持っているはずの間までがまったく無視されたような、急な変わりかただった。

「でも驚いたって言うのはズボシよ、その日の仕事始めって言うのかしら、最初の男を見たときいつも驚くって言うのかドキンとするの。この商売していれば、だれでもそうなのかも知れないけれども、あたしの場合自分でも病的だと思うの。普通ドキンとするのは胸の中でしょ。あたしのは違うの。頭の中でドキンとしておまけに頭の中に赤い光線が走るんだから。一瞬だけど鮮明なの。これだけはいまもって治らない。あたしの職業病なのかな。でも、おかしいことに一人の客を相手にするとあとは平気なの」

そこまで話すと、また信号が変わった。幼かったころが思い出されるM子の顔だった。

「なんだか、つまらないこと話してしまったようね……それよりなにか用事があったんじゃない」

M子はマッサージ台の隅に身を寄せた。私はすすめられた椅子にでも腰をおろすように、M子の横に腰かけた。派手なタイルの床は乾いていた。隅の浴槽の湯も薬袋を入れたばかりなのか、蛍光灯の明かりで緑色に輝いていた。M子の言うとおりの、仕事前のようなだった。

「別に用事なんてないんだ。ただ、なんとなく会って話がしたくなったもんで……。でもM子ちゃんの都合があるんなら、またいつもの時間に出直してもいいんだ」

堂間の処刑場での姿が目に残るんだが、ついそんな風に言ってしまった。

「なに言ってるの、この商売に都合なんて……。でも、あなたの顔、いつもと違う。なにかあつ

たつていう顔しているわ、そのくらいあたしにだってわかるわよ」

M子は立ち上がると浴槽の前に行き、腰を割るようにしてしゃがみ込み、両手で浴槽の湯をすくい、叩くようにして顔を洗った。激しい動作で何回も繰り返した。私は流れた湯が乾いたタイルの上を広がり私の足元まで迫って来るのを見ながら、なんとなく胸騒ぎを感じた。嫌な予感だった。M子はいつものように、ちょっと怒った表情。おどけ。早口なおしゃべり。どこも変わった様子はなかったが、顔のどこかが泣いてるみたいに思えた。

「なにか話があったんでしょ。早く言っちゃうだい」

堂間が……私は咽元まで出かかった言葉を抑えた。このまま話し出すと、昨夜、訪ねて来た教会関係者と名乗る男と、まったく同じような「堂間の処刑報告」になってしまうと思った。M子に会いに来たのは堂間の死んだ知らせもあったが、目的は妹の稲美が堂間との結婚を夢みて一点、現金にしようか、月賦にしようか、私も相談に乗り食費まで詰めて揃えた、いわば稲美の遺品のような家財道具のうち、まだ一度も使ったことのない電気製品類を使ってもらえまいかと頼むためだった。

「黙っているんだったら、あたしの方にも話すことがあるの……。あなたも知ってる、あのT子が一週間前に……じゃったの。もっと早く知らせようと思ったんだけど、あなたに直接会って話したかったのでついつい遅くなってしまったの」

洗った顔が濡れたままだった。言葉が水でふやけたように肝心のところが、はっきり聴き取れ

なかった。一週間前に「消えちゃったの」「死んじゃったの」「けんかしちゃったの」どれにもとれる言葉に聞こえた。T子はM子と気の合った、この店の同僚だった。店で働く女性の多くが、縁台将棋の「王将」駒のように、負けとわかっていても悲しい顔、苦しい顔一つ見せないで、動ける方向なら最後までどこにでも転々とする。それがダメならあと一丁と駒を並べ直す……。そんな気軽な王将のように店を転々とした生き方のようにだったが、M子とT子は勝負の場から遠く離れた駒のように、かれこれ二年も同じ店にいた。部屋が隣り合っている関係もあって、その日、その日の出来事は筒抜け。お互いぶちまけた話をする間柄のようだった。私も二、三度、二人に招待された格好で、目を見張るようなレストランで食事をしたり、酒を飲んだことがあった。T子はM子より三、四歳年上ということだったから、二十三、四歳のはずだった。小柄だが、こづかれても、転がされても、ニッコリ立ち上がるダルマのように眉だけはっきりした憎めない人柄だった。

「あなたもよく知っている、あのT子が死んだのよ」

T子の遺体が、すぐ脇にでも横たわっているような言い方だった。

だが私には「T子」と死が、すぐには結びつかなかった。T子とはつい一カ月前、品川のはずれの商店街で偶然会ったばかりだった。太り気味のT子は、私に気づくと軀を左右に揺するアヒルのような歩き方で、走るように寄って来た。

「最近見えないじゃない。きょうは私のお店探しのよ」

人通りも気にせず大声で言った。

「彼も一緒に来るはずだったのにダメだったの。でも決めちゃおうと思うの」

いつも蛍光灯の下でしか見たことがなかった義歯の前歯が、宝石のように輝いていた。ただ不揃いだという理由だけで百万円もかけた……と自慢するだけの美しさがあった。お金もできたし自分の店を持つんだと言いながら、別れるまで口元を全開するような笑顔を見せていた。死んだとすれば、なにか事故にでも遭ったとしか考えられなかった。

「少しも驚かないのね」

M子は厳しい声だけ私に向けたが、濡れたままの顔はつまらない捜し物でもするように、目をキョロキョロ動かしていた。部屋にはなにもなかった。化粧品箱、瓶、菓子罐、派手なタオルが六、七枚重ねてあるだけだった。いつまでも捜し物の顔はしていられなかった。マッサージュ台の下から私物の衣服を取り出すと、めんどくさそうに着替えをはじめた。水着のような仕事着からの着替えだったが、手品師のような仕草をしていたかと思ったら、袖に手を通し終わり背中のチャックを器用にしめた。手足が自由に取りはずせるマネキン人形が衣服を着けているみたいだった。

「丁子が死んだというのに、顔色一つ変えないで平気なんだから……。とやかく言っても仕方ないけど、あなたに半分ぐらいの責任があると思うのよ。それなのに……」

興奮すると自己流に言葉を省略してしまう癖は、これまでも経験し馴れていた。母親の急死を

知らせに、私の住む共同住宅を訪ねて来たときも、入り口に立ったまましゃべり出した話の内容が、さっぱりわからなかった。母親の死の原因を話してるのはわかるのだが、なにか肝心なところが抜けてしまっていた。だが、話が一段落するころは内容がつかめた。しかしいまのT子の死を伝える話し方は、あまりにも一方的で、しかも短過ぎた。T子の死が私に重大な責任があるような口ぶりだが、どんな形で責任があるのか、考える糸口すらないように思えた。

私は甲羅に首を引っ込めたカメのように、軀を縮めてしまった。胎児の姿勢がM子の構えなら、左右の鎖骨の間に頸骨を無理矢理押し込んだ格好は、なにかに直面し耐えるときの私の構えのようなものだった。終戦間際に幼い稲美と二人で村を出てから上野の地下道や神田の周辺で浮浪生活をしていたころ、厳しい寒さの中で自然に身についた癖のようなものだった。稲美にも冷えた軀をさすりながら教えた記憶があった。骨の間に骨を押し込んで、軀が温かくなるわけでもなかったが、ただ血液の流れが圧迫され首から上だけでも、充血した温かさみたいなものを感じた。堂間が困惑した表情で、稲美さんとは遊びだったんですよ——そう言ったときも、私は同じような構えで耐えた。

頸骨の周辺に力を入れると、朝の紙の輪の行事の痛みが残っていた。その疼きのような痛みを感じたとき、もしかすると——そう思うと胸の動悸が高まった。M子は着替えのあとに続く動作を忘れてしまったように立っていた。今年の冬二、三度見かけた格子模様のワンピースは、どことなく色あせ踵の高い派手なサンダルが、なんとも不釣り合いだった。堂間も死んだ。T子も死ん

だ。そしてこの私は、なんとなく死にそこなった。死んでしまった二人の死に、どうやら深いかわりがありそうだった。そう思いながらも、T子の死が、信じられなかった。T子が死んだとすれば紙の輪の行事か、それに似た方法だと思った。ソフト二枚重ね、六十五メートルシン目入り。朝の紙の輪の行事に使ったトイレットペーパーが目には浮かんできた。ソフト二枚重ね。シン目入り。何の意味もなかったが、その新製品の宣伝文句が頭から離れなかった。

「Tちゃん、どうして死んだのかな……」

精いっぱい落ち着いて言ったつもりだったが、木霊のように戻って来た声は震えていた。T子が紙の輪の行事で死んだのなら、どんなにM子から責められても仕方ないように思われた。

M子は台の隅に腰をおろすと、棚の外国製の菓子罐からガムの包みを取り出し、いくつも口に入れた。化粧を落とした顔は、幼さが抜け切れないで行き場に困っているようだった。ガムを噛むたび両頬が、時計の振り子でも含んでるように左右にふくらんだ。いまいまの怒り、悲しみ、苦しみ、なにもかも——そんなすべてを噛んで飲み込んでいる、そんな顔だった。

「なにさ、そんなに鉢中力を入れてるみたいにして。かしこまっているみたいじゃない。あたしも少し言い過ぎたかな……。お互い深刻な顔でにらみ合ってるのやめましょう」

「そんな深刻な顔かな」

鎖骨の間に押し込まれていた頸骨が、ピョコンと飛び出た。なんとなくホッとした。

「いつもと違った顔だったわよ。人違いしそうだったもの。そう、なにかが抜けてしまったと

いうのか……。それに、あなたに会いたくなつたのでとか言つてさ。いつまでも深刻そうよ。なにか用事があるんでしょうが、あなたのことだからたいがいのことは承知するつもりよ。あたしにもいろいろあるし……」

「そう頼みもあるんだ。だが、その前にT子が死んだと言うが、いま少し詳しく聞かせてくれな
いか。半分責任あると言われたし」

「もういいのよ」

M子は台の上に坐り直した。両膝を抱え正面から私を見詰めた。

「T子が死んだというのに、あまり平気な顔してたようだから、つい腹が立ってしまったみたい。でも、もういいんだ。済んでしまったことだし。そう、女が、それもあまり幸せでなかった一人の女が、なんとなく死んでしまったっていうことなんだから」

これまでの自己流に言葉を省略するのは違った、なにか投げやりな言い方だった。

「正直に言うと、話すのがめんどくさくなっちゃったの。あなたに責任あるって言ったのも、あたしがそう思っただけのこともかもしれないし」

疲れたように、両膝に顔を預け目だけ向けた。私も深追ひしてまで聞きたくなかった。いずれM子は話すだろう。それでよいと思った。

「それならいいんだ。でも、すべてかたがついたの」

「だって、きょうで一週間も経つたのよ。T子が死んだくらいで、そう何日も手間がかかったん